

## 敬和学園大学のキリスト教教育(4資料付)

2022. 9. 30. 山田耕太

### 1. 敬和学園はどのようにして成り立ち、どのような連携があるのでしょうか？

学校法人敬和学園は日本基督教団総会決議により発足し、敬和学園高校は1968年に新潟開港100周年事業の一環として太夫浜に新潟市から土地の提供を受けて、地元のプロテスタント諸教会の祈りの結実として始まりました。また、敬和学園大学は1991年に学校法人敬和学園が新発田市・聖籠町・新潟県の多大な援助を受けて開学しました。敬和学園は、1887年に開設され6年後に閉校となった新潟女学校と北越学館という明治時代のキリスト教学校の精神を継承しています。パーム館やニューエル館の名前の由来であるパームとニューエルは、そのころの宣教師です。

敬和学園はプロテスタントの102学校法人で構成されるキリスト教学校教育同盟に属しています。これには青山学院大学、国際基督教大学、明治学院大学、立教大学、同志社大学、関西学院大学など4年制大学の58大学(2022年現在)が所属しています。また、敬和学園大学は早稲田大学、慶応義塾大学、中央大学、上智大学など123大学(2022年現在)が属している私立大学連盟にも加盟しています。新潟県内では高等教育コンソーシアムにいがたに属して、県内30の高等教育機関(2022年現在)と連携しています。

### 2. 「敬和学園」という名前は何に由来するのでしょうか？

敬和学園の「敬和」という名称は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」というイエスの教えに由来します(マルコ12:28-34)。これはキリスト教の真髄を表しています。敬和学園高校の初代校長太田俊雄は「神を愛する」を「敬う」に「隣人を愛する」を「和する」に日本的な文脈に置き換えて、「敬和」と命名しました。また、高校創立時点で、大学などを含む一連の学園構想を持っていたので「敬和学園」と命名しました。

### 3. 敬和学園大学の使命は何でしょうか？

敬和学園大学の使命は、「良心的な国際的教養人の育成」(大学学則第一条)です。教育理念のモットーを高校では「敬神愛人」として表現していますが、大学ではそれをルターの『キリスト者の自由』の精神に立ち帰り、21世紀は多様な「ヒューマン・サービス」が求められる時代であることを見据えて、「神を敬い、人に仕える」と言い直しています。その上で大学では、教育理念(学則第一条)を次のミッション・ステートメントとして表現しています。

「敬和学園大学は、キリスト教に基づく自由かつ敬虔な学風の中でリベラルアーツ教育を行い、グローバルな視点で考え、対話とコミュニケーションとボランティア精神を重んじ、隣人に仕える国際的教養人を育成します。」

リベラルアーツ教育の目的として、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネ8:32)、すなわち「真理を尋ね求めて自由を得る」という聖書の言葉を掲げています。「尋真館」という名前は、ここに由来します。

### 4. 敬和学園大学のキリスト教教育は何を目指しているのでしょうか？

敬和学園大学の教育理念は「キリスト教」を根底にしています。これは学生や生徒をキリスト教の信仰に入信させることを目的とするものとは異なります。敬和学園大学の「キリスト教」は、人権・共生・平和を大切にすキリスト教の価値観に基づいた文化的営みを目的とする「キリスト教教育」です。「キリスト教教育」では伝統的に、女子教育、外国語教育、国際教育などに力を入れてきました。しかし、現在は地域社会の中で知の拠点となることに力を入れています。

敬和学園大学では主に次の3点をとおして、キリスト教教育への導入を行ないます。第1に毎週1回のチャペル・アッセンブリ・アワーという礼拝と講話の時間をとおして心の教育を行い、第2にキリスト教学やキリスト教関連科目によりキリスト教の基礎的知識を提供し、第3にボランティア論の授業やサービラーニングをとおして実践的な教育を行ないます。また、入学式、卒業式、クリスマス行事などの学校行事は、キリスト教の礼拝形式で行われます。

## 5. 聖書とは何でしょうか、それはどのような世界観で書かれているのでしょうか？

### (1) 聖書とは何でしょうか？

聖書は世界で最も読まれている書物です。それは世界の人口 77 億人の約 1/3 がキリスト教徒であるからです。「聖書」(バイブル)という言葉は、古代フェニキアの港町「ビブロス」という地名に由来します。ビブロスからはエジプト産の良質なパピルスが輸出されていました。当時の聖書はパピルスに書かれていたので「ビブロスもの」から「バイブル」と称されました。日本では先に中国で訳された漢訳聖書のタイトルをそのまま用いて「聖書」と呼ばれています。

キリスト教はナザレのイエスが救い主であるという信仰により古代ユダヤ教から誕生しました。その後、さまざまなタイプのキリスト教が生まれましたが、それらを決定づけているのは、すべてのキリスト教に共通の旧約聖書と新約聖書です。聖書では、神と人間の約束である「契約」が中心に貫かれています。モーセの「古い契約」(出エジプト記 19-24 章、II コリント 2:14)とイエスの「新しい契約」(ルカ 22:14-23、II コリント 3:6)から、それぞれ「旧約聖書」と「新約聖書」と呼ばれています。

旧約聖書の原典は、古代ユダヤ教の時代にヘブライ語で書かれました(ダニエル書の一部はアラム語)。ヘブライ語の原典では「モーセ五書」とも呼ばれる「律法」、「前の預言者」と呼ばれる歴史書と「後の預言者」と呼ばれる狭い意味での「預言書」、詩や歌や歴史などの種々雑多な「諸書」という三部で構成されています。

アレクサンダー大王以降のヘレニズム時代には、ユダヤ人は戦争・飢饉・自然災害や経済活動などの理由で、パレスティナ本土を離れていきました。本土を離れた「離散」(ディアスポラ)のユダヤ人が使っていたのは古代の東地中海で共通語であったギリシア語に訳された七十人訳聖書です。ヘブライ語聖書と七十人訳聖書の内容は同じですが、ヘブライ語とギリシア語という書かれた言語ばかりでなく、配列が多少異なります。七十人訳聖書では、「諸書」と「預言書」の内容を整理して並び替え、「モーセ五書」「歴史書」「詩歌」「預言書」の四部で構成されています。

最初のキリスト教徒はすべてユダヤ人でしたが、パレスティナのユダヤ人から始まり、やがて離散のユダヤ人に広まり、離散のユダヤ人が主流になったので、キリスト教の旧約聖書の配列は、彼らが使っていた四部構成の七十人訳聖書に従っています。ユダヤ教の聖書は、キリスト教の旧約聖書と同じ内容ですが、三部構成のヘブライ語聖書の配列に従っています。イスラーム教のコーランには旧約聖書の重要な物語や福音書のイエスやマリアの物語が含まれています。すなわち、旧約聖書はユダヤ教とそこから生まれたキリスト教やイスラーム教にとって共通の母であり、世界の一神教の共通の世界観を提供しています。

ユダヤ教とイスラーム教では、イエスは預言者であると認めますが、救い主(メシア、キリスト)であるとは認めていません。ナザレのイエスを救い主(メシア、キリスト)と告白するのは、唯一キリスト教の新約聖書です。新約聖書の原典はギリシア語で書かれていますが、主に「福音書」と「手紙」(使徒書)に分かれます。前者は、イエスについての生涯と教えを記したマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書と使徒たちの記録を記したルカ福音書の続きである使徒言行録で構成されています。後者は、パウロの名前で書かれた手紙を中心とした使徒たちの手紙、それに手紙形式で書かれた終末のビジョン(幻)を記したヨハネ黙示録で構成されています。

### (2) 聖書の世界観で書かれているのでしょうか？

聖書の世界観では、神は目に見えない永遠の存在で、この世界の「創造者」であり、自然も人間も神によって創られた「被造物」と考えられています。すなわち、神は命の源であるのです。この創られた世界には終末があり、歴史の世界は創造と終末の間にあると考えられています。聖書はこの創られた世界である環境と歴史に基本的に関心を注ぎます。また、神は自由意志をもつ「人格神」です。それは、不正を裁く「正義」であると同時に慈しみ深く赦す「愛」という 2 つの顔を持ちます。

聖書の人間観は、アダムとエバの神話的な物語に描かれているように、人間は神と同じように自由意志と人格(パーソナリティ)をもつ「神の像(かたち)・神の似姿」であり、その点において人間は他の「被造物」とは区別されます。しかし、人間には自由意志を用いて神との約束を破ってしまう、「神の御顔を避ける」という一面もあります。その点では自由意

志の責任が問われる存在でもあるのです。このように、聖書の人間観は、「神の像」であると同時に「神を避ける」という二重の姿で描かれています。パスカルの言葉を用いれば、「栄光」と同時に「悲惨」という二重の人間観です。すなわち、人間には「善」と同時に「悪」が存在するという人間観です。基本的人権などの人権思想は、「善」の部分で、究極的には「神の似姿」という人間観に遡ります。人間の罪や争いや死は、「悪」の部分で、「神の御顔を避ける」人間観に由来します。後者は伝統的に「原罪」と呼ばれています。キルケゴールは現代人のその特徴を「不安」と「絶望」に見ました。アウグスティヌスは人間の魂は神に出会うまで「平安」を得ることができないと言いました。そのため、「神の御顔を避ける」人間は平安を求めて、結局神へとたどり着くと言っています。

旧約聖書での救いは、「ユダヤ人の子孫」と「パレスティナの土地」を中心にして、「出エジプト」やバビロン捕囚からの「帰還」に象徴されるように、この地上の世界に限られています。しかし、キリスト教の救いは、民族を越えて世界的な視野に拡大した預言者の精神を継承して、ユダヤ人と異邦人という人種を越えた全人類の救いになっています。また、旧約聖書の「約束の地」の「パレスティナの土地」は、新約聖書では「天上の国」に象徴化されています。人類の救いはキリストの十字架上で犠牲の死によって達成され、人間は神との和解すなわち平和を得るのです。そこでは、究極的な救いは、やがて死後の世界で達成されると考えられています。

また、イエスが説いた神の国は、愛と自由の支配する領域であり、他者と共に生きる社会を創り出す源と考えられています。パウロの言葉を用いれば、「神の国」への明確なヴィジョンを描いて「信仰」と「希望」に生き、この世で「愛」の行為に生きることで（Ⅱコリント 13:13）。つまり、キリスト教は愛の宗教、希望の宗教と言えるでしょう。それでは聖書を何のために読むのでしょうか。それはいかに生きるかという「オリエンテーション」（方向付け）のために読むのです。

### (3) キリスト教はどのような歴史を経てきたのでしょうか？

キリスト教は、ローマ皇帝コンスタンティヌスがキリスト教をローマ帝国の国教として認める道を開いた 313 年以前の絶対平和主義の最初期のキリスト教と 313 年以後の正義のための戦争を認める国教化したキリスト教の 2 つのタイプがあります。ローマ帝国はやがて西ローマ帝国と東ローマ帝国（ビザンティン帝国）に分裂しましたが、それに応じてキリスト教の潮流もそれぞれ西ローマ帝国の西方キリスト教と東ローマ帝国の東方キリスト教に大きく分かれて行きました。西方キリスト教とは、カトリックの流れですが、16 世紀にはマルティン・ルターやカルヴァンらの宗教改革により、そこからプロテスタントの諸派が出てきました。東方キリスト教は、ギリシア正教の流れですが、9 世紀にはキエフ公国（ウクライナ正教）やモスクワ公国（ロシア正教）に広まり、その後には東ヨーロッパのさまざまな正教に分かれていきました。

しかし、東西のキリスト教は聖書が一致しているばかりでなく、4 世紀から 8 世紀までの 7 つの公会議を認めており、重要な教義の内容においても一致しています。「キリストは真の神であり、真の人である」というキリストの神性と人性を認めた「キリスト両性論」や「父なる神」「子なるキリスト」「聖霊なる神」の人格の相違と神性の一致を認めた「三位一体論」などは、最も重要な教義です。キリスト教が分かれていった多くの場合は、政治的な理由や歴史的展開に応じて在来文化を摂取していった過程などに由来しています。カトリックは、神と人間の間を執り成す聖人を認める点、その中でもとりわけマリア崇敬を認める点、ローマ法王の権威を認める点などでプロテスタントと異なります。ギリシア正教・ロシア正教は、イコンを聖像画として用いる点、聖化した人間が神化する神秘的な教義を認める点などがカトリック・プロテスタントと異なります。

20 世紀に入ると、キリスト教が一致する「教会一致運動」（世界教会、エキュメニズム）が盛んになり、カトリックとプロテスタントと諸正教は、他の伝統を認めつつも一致を深めています。また、二度の悲惨な世界大戦を経た 20 世紀以降のキリスト教では、特に 1960 年代のヴァティカン公会議以降は、キリスト教と諸宗教との対話が盛んになっています。

敬和学園の教育理念の根幹に据えているキリスト教はルターやカルヴァンなどの宗教改革に由来するプロテスタントのキリスト教です。以上述べたように、愛と自由を土台にしたキリスト教精神に育まれて、人権・環境・平和・共生などの価値観を基盤にしたリベラルアーツ教育や文化的営みが生まれてくるのです。敬和のキリスト教教育の目指すところは「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ 8:32）です。

## 資料1. キリスト教用語集

### アドヴェント(Advent)

「待降節」と言う。ラテン語でキリストの「到来」を意味する。クリスマスの4週間前の日曜日から「アドヴェント」に入る。クリスマスの飾付やツリーの点火式を行なう。この期間にクリスマスカードを送る。

### アッバ(Abba)

民衆の言葉であるアラム語で幼児が父親を呼ぶ言葉。イエスは幼児が父親を信頼するように神に絶対的に信頼して祈りの中で「アッバ」と神に呼びかけた(ルカ 11:2、マルコ 14:36)。以来、キリスト教では「(アッバ)父よ」(ローマ 8:15、ガラテヤ 4:6)と祈りの中で神に呼びかける。

### アーメン(Amen)

ヘブライ語で「エメト」(真実)に由来する言葉で、「本当です」という意味。「キリストの御名によってお祈りします」という言葉の後で、「アーメン」と言って唱和する。

### イエス・キリスト(Jesus Christ)

ナザレの「イエス」は「キリスト」すなわち「救い主」である、という信仰告白に由来する言葉。次第に固有名詞であるかのように使われる。

### イースター(Easter)

キリストが復活した朝から「曙」という言葉に由来する言葉。キリストの復活を祝う日。移動祝祭日で春分の日の直後の満月の次の日曜日。キリスト教の三大祭の一つ。復活の象徴として卵を用いる習慣がある。

### イスラエル(Israel)

ヘブライ語で「神に勝つ」の意味。神の使いに勝った族長ヤコブのエピソード(創世記 32 章)に由来するヤコブの別名。また、ヤコブの子孫であるイスラエルの12部族すなわちユダヤ人(「ヘブライ人」とも言う)をも指す。「神の民」をも象徴する。

### 祈り(Prayer)

目を閉じ手を合わせ心を集中して神と対話すること。古代では立って祈り、中世ではひざまずいて祈る習慣があった。神を讃える祈り(例、出エジプト記 15 章)、願いの祈り(例、詩編 90 編)、とりなしの祈り(例、創世記 18 章)、祝福の祈り(例、民数記 6:24-26)、感謝の祈り(例、サムエル記上 2:1-10)、悔い改めの祈り(例、詩編 51 編)がある。「主の祈り」(マタイ 6:9-13、ルカ 11:2-4)と「ゲッセマネの祈り」(マルコ 14:35-36)は有名。

### インマヌエル(Immanuel)

ヘブライ語で「神は我々と共におられる」という意味(イザヤ書 7:14)。イエスの誕生物語で天使が、メシア預言の成就を告げる(マタイ 1:23)。神が人間に寄り添って共に歩む存在であることを示唆する(詩編 23:4、139編)。

### 栄光(Glory)

神は栄光に満ちた存在で、人間の生きる究極的な目的は神の栄光を表すこと(詩編 8 編)。「栄光館」の名前の由来。

## 回心 (Conversion)

「改心」は道徳的な事柄を指すが、「回心」は宗教的な事柄を指す。心を神に向けて、神に立ち帰ることを意味する。

## ガウン (Gown)

ガウンは修道士の作業着に由来する言葉。学問を重視したドミニコ会の修道士はブラック・モンクと呼ばれ黒いガウンを着、貧者の救済活動を重視したフランシスコ会の修道士は灰色の作務衣を着、枢機卿は赤いガウンを着た。中世の修道院から大学が誕生したが、中世の大学で最初にできた神学部出身の司祭・牧師と法学部出身の裁判官はドミニコ会の黒いガウンを着る中世以来の習慣がある。医学部出身の医者はフランシスコ会の作務衣の代わりに白衣を着る。「ガウン」は大学を象徴し、「タウンとガウン」で「町と大学」を意味する。

## カナン (Canaan)

旧約聖書でモーセに率いられて出エジプトし、荒野を旅したイスラエルの民が入る希望を懐いていた「乳と蜜の流れる地」「約束の地」パレスティナのこと。土着の民はパレスティナ(ペリシテ人の土地)を「カナン」と呼んだ。

## ガリラヤ (Galilee)

イエスが活動したパレスティナの北部。ガリラヤ湖の北岸にはイエスの活動の拠点であるカファルナウムがあり、ガリラヤ湖の西にはイエスの故郷のナザレがある。

## 感謝 (Thanksgiving) ・ 賛美 (Praise)

神の「恵み」(Grace)の中で生きる人間が、神に応答する基本は、感謝と賛美である。

## 義認 (Justification)

神の前で正しいと認められること。信仰によって義と認められる立場を信仰義認論といい(ローマ3-4章)、行為によって義と認められるとする立場を行為義認論と言う(ヤコブ2章)。

## キャロル・キャロリング (Carol, Caroling)

中世のクリスマスに民衆の間でキリストの誕生を祝って歌う習慣が生まれたが、その歌曲のことをキャロルと言う。やがてキャロルを歌いながらダンスをして町を練り歩く習慣が生じたが、これがキャロリングの始まりである。アドヴェントやクリスマスにクリスマス・キャロルを歌って、家々や病院や施設を訪問することをキャロリングと言う。

## キリスト (Christ)

ヘブライ語の「(即位式で)油注がれた者」(マーシアツハ)のギリシア語表記に由来。元来は「王」を意味していたが、預言者の時代から「救い主」の意味に転じられる。

## 悔い改め (Repentance)

罪を犯した人間が神の前で罪を懺悔すること。神は動物の犠牲よりも悔い改めの心を喜ぶ(ホセア6:6)。

## グッド・フライデー (Good Friday)

キリストが十字架につけられた金曜日。「聖金曜日」とも言う。受難週はイエスがエルサレムに入城した「棕櫚の日曜日(Palm Sunday)」から始まる最期の一週間。受難日にはキリストの十字架上での苦難を偲ぶ。その三日後の日曜日が「イースター(復活節)」。

### クリスマス (Christmas)

「降誕節」と言う。「キリスト」(クリスト)の「ミサ」(マス)に由来。クリスマス・イヴ礼拝で「ミサ」(カトリック)または「聖餐式」(プロテスタント)を行なうことから名づけられた。紀元4世紀にローマで12月25日にクリスマスを祝い始める。キリスト教の三大祭の一つ。

### シオン (Zion)

エルサレムの古い表現で、「神の民」を象徴する。エルサレムの南側の丘の地名に由来する言葉。「天のエルサレム」を意味する場合もある。

### シャローム (Shalom)

ヘブライ語で「平和」または「平安」の意味。「愛」と「正義」によって「平和」が生まれる。日常の挨拶で「おはよう」「こんにちは」「今晚は」「さようなら」などの挨拶で用いる。

### 十字架 (Cross)

イエスが処刑されたローマ帝国の死刑制度。イエスの十字架は呪いの印ではなく、そこには人類の罪を処罰した神の義と愛が啓示される(ローマ 1:17、3:21-31、5:1-11、ヨハネ 3:16)。

### 受肉 (Incarnation)

神の子が、己をむなしくして謙虚になり、人間の姿をとること(ヨハネ 1:14、フィリピ 2:7)。

### 信仰 (Faith)

目に見えない神を信頼し、期待し、また応答して生きること。知識・信仰・懐疑の三つは密接に関連する。

### チャペル (Chapel)

4世紀の聖マルティンの法衣(カペラ)を奉った教会付属施設に由来する言葉。教会でない礼拝堂を指す。

### バプテスマ (Baptism)

ギリシア語で「洗礼」(水に沈めること)を意味する。キリスト教の入門式。古い人が死に新しい人に甦ることを象徴。川・海・湖や洗礼槽などで水の中に沈む「浸礼」と洗礼盆などから手で頭に水をかける「滴礼」がある。

### ハレルヤ (Hallelujah, Halleluiah)

ヘブライ語で「ヤ(ハウエ)」すなわち「神」を「讃える」(ハーラル)に由来する言葉。神を讃える言葉。神への感謝や称賛の祈りに唱和して用いられることがある。

### 福音 (Gospel)・福音主義 (Evangelicalism)

イエスの生涯と使信、特に十字架と復活に表された「よい音信(おとずれ)」(Good News)が「福音」。それを表しているのが「福音書」(Gospels)。一つの「福音」に四つの「福音書」。「福音主義」とは広い意味ではルターが再発見したパウロの信仰義認論に基づくプロテスタントのこと、狭い意味では社会的事柄に関心を持つ「社会派」とは対照的に純粋に信仰を保つ「福音派」のこと。

## 復活 (Resurrection)

十字架上の苦難の死の三日後に起こった出来事。肉体の死が終わりではなく、肉体の命とは別に新しい命があることを示す( I コリント 15 章)。希望の源。復活を記念して日曜日に礼拝する。

## ペンテコステ (Pentecost)

ギリシア語で「50 日目」を意味。日本語では「五旬節」「聖霊降臨節」と言う。復活後の「50 日目」の教会の始まり(使徒言行録 2 章)を祝うキリスト教の三大祭の一つ。

## メシア (Messiah)

ヘブライ語の「油注がれた者」(マーシアッハ)の日本語表記。「救い主」を意味する。ギリシア語では「キリスト」という言葉に相当する。

## ヤハウエ (Yahweh; Jehovah)

ユダヤ教・キリスト教の神の固有名詞。「存在する」(ハーヤー)というヘブライ語から派生し「存在をもたらすもの」という意味。全てのものの存在の根拠。燃える柴の場面で、神が「私は在って在る者」(出エジプト記 3 章 14 節)と名乗ったことに由来する言葉。十戒の「あなたの神、主の御名をみだりに唱えてはならない」という戒めから、ユダヤ教徒は「ヤハウエ」(YHWH)という神聖文字が現れると、文字通り発音しないで、「主」(アドナイ)と読み替えてきた。

## レント (Lent)

ラテン語の「長い」に由来。日本語では「四旬節」「受難節」と言う。「灰の水曜日」から復活節までの 40 日間。克己節制に努める習慣がある。最後の週を受難週と言う。

## 参考資料2. 旧約聖書の主な登場人物

### アダム (Adam)

人類の始祖(創世記 2:4-3 章)。名前はヘブライ語の「アダマー」(土)に由来し(2:7)、土から取られ、土に返っていくことを象徴(3:19、詩 90:3、104:29)。神の戒めに背いたことで、人類の罪が始まり(3 章)、その結果、苦しみと死が始まる(3:14-19)。

### アブラハム (Abraham)

イスラエル民族の先祖で最初の族長(創世記 11:27-25:11)。名前は「諸国民の父」(17:5)という意味。子孫が繁栄し、「カナン」(パレスティナ)の土地を得る約束を神から受ける(12:1-2、15 章)。妻サラとの間にイサクが(17:15-19、18 章、21:1-8)、エジプトの奴隷ハガルとの間にイシュマエルが生まれる(17:20-27、21:9-21)。イサクを献げる場面(22 章)から、「信仰の父」と呼ばれる。

### アロン (Aaron)

モーセの兄、最初の祭司(出エジプト記 4-24 章、32 章、民数記 12、16-20 章)。口下手なモーセに代わり、モーセの代弁者として語ってモーセを助ける(出エジプト記 4:10-17)。十戒を受けにシナイ山に登ったモーセの帰りが遅いので、「金の子牛」の像を造って偶像礼拝の罪を犯す(出エジプト記 32 章)。

### イサク (Isaac)

アブラハムの子、イスラエル民族の族長の一人(創世記21:1-8、22章、24章-28:5、35:27-29)。名前は「笑う」というヘブライ語に由来(17:19、21:6)。イサクとリベカの結婚物語(24章)は有名。二人の間には、ヤコブとエサウという双子の兄弟が生まれ(25:19-26)、弟ヤコブはレンズ豆のスープ一杯で兄エサウから長子の権利を奪い(25:27-34)、父イサクの祝福を奪う(27章)。

### イザヤ (Isaiah)

イスラエルの三大預言者の一人。名前は「神は救い」という意味。第一イザヤ(1-39章)、第二イザヤ(40-55章)、第三イザヤ(56-66章)に分れる。イザヤはアッシリア捕囚(紀元前8世紀)前後の南王国の預言者、イスラエルの背信によりアッシリア民族の侵攻とイスラエルの回復を預言。第二イザヤはバビロニア捕囚期(紀元前6世紀)にバビロニアからの帰還を預言。第三イザヤは捕囚期以後にイスラエルの祝福を預言。

### エステル (Esther)

エステル記の主人公の女性。ペルシアのアハシュエロス王の王妃となり、いとこのモルデカイと協力して、ペルシアの高官ハマンの策略を打ち破り、イスラエル民族を救出する。

### エズラ (Ezra)

バビロニア捕囚から帰還した時のイスラエル人の指導者、最初の律法学者。名前は「助け」という意味。バビロニア捕囚から帰還して、異民族の支配の下で律法と律法学者を中心としたユダヤ教を組織する(エズラ記)。

### エゼキエル (Ezekiel)

イスラエルの三大預言者の一人、バビロニア捕囚期(紀元前6世紀)の預言者。名前は「神はかづける」という意味。バビロニア捕囚はイスラエル民族の背信の罪への神の裁きであると宣言し、イスラエル民族の信仰の回復と復興を預言する(エゼキエル書)。

### エバ (Eve)

人類の始祖(創世記2:4-3章)。名前はヘブライ語の「命」に由来し、人類に命を与えた母なる存在(3:20)。アダムとエバは元来一つであり、結婚は一つの体に戻ることとされる(2:18-25)。神に敵対する蛇に誘惑されて、人類の罪が始まったとされる(3章)。

### エフタ (Jephthah)

ギレアドの勇者、士師の一人(士師記11-12章)。不遇であったが、アンモン人との戦いで先頭に立つことを求められ、勝利した時には最初に迎えに来た人を犠牲に献げると誓うが、戦勝後に迎えに来た最愛の一人娘を献げる。

### エリシャ (Elisha)

預言者エリヤの弟子、最初の預言者の一人(列王記上19:19-21、列王記下2-12章)。名前は「神は救い」という意味。エリヤに召し出され(上19章)、エリヤの昇天の直前に、エリヤの霊を受け継ぎ、ヨルダン川の水を分け、悪い泉の水を清める奇跡・子供の蘇生・パンの奇跡・らい病人の癒しの奇跡(下2-5章)などを行なう。

### エリヤ (Elijah)

最初の預言者(列王記上17-19、21章、列王記下1-2章)。名前は「ヤハウェは神」という意味。預言するばかりで



なく、神から遣わされた「神の人」の印として、干ばつを預言し(上 17-18 章)、パンの奇跡と死者の蘇生(18:8-16、17-24)や外套でヨルダン川の水を分ける奇跡を行なった後に、火の戦車に乗って昇天する(下 2 章)。

### エレミヤ(Jeremiah)

イスラエルの三大預言者の一人。バビロン捕囚期直前(紀元前 7-6 世紀)の南王国の預言者。イスラエル民族の背信と罪を責めて悔い改めを促し、新しい契約(31:31-34)とイスラエルの回復を預言する(エレミヤ書)。エルサレム滅亡の「哀歌」から「涙の預言者」と呼ばれる。

### ギデオン(Gideon)

士師の一人(士師記 6-8 章)。名前は「石切り」の意味。敵のミディアン人との戦いで、用心深く水を飲む精鋭の兵を選んだエピソードは有名(7 章)。

### サウル(Saul)

イスラエルの最初の王。名前は「(神に) 尋ねた」という意味。王位はサウル家からダビデ家に継承される(サムエル記上 9 章-サムエル記下 1 章)。

### サムエル(Samuel)

士師時代の最後の士師(サムエル記上 1-16、25 章)。母ハンナの熱心な祈りにより奇跡的に誕生し、祭司エリに仕える(1-3 章)。民が王を求めると、サウルを王とする(8-10 章)。サウルが神に背いたので、王権をダビデに委譲する(16 章)。

### サムソン(Samson)

士師の一人(士師記 13-16 章)。怪力でペリシテ人を悩ます。その秘密は髪の毛にあったが、遊女デリラに漏らして敵方に捕まる。最期に死力を振り絞って敵を滅ぼす。

### サラ(Sarah)

アブラハムの妻。長年子が与えられず(創世記 12-20 章)、やがて約束の子イサクが与えられる(18、21 章)。アブラハムが生前に約束の土地パレスティナで得たのは、サラを埋葬するためのマクペラの洞穴でしかない(23 章)。

### ソロモン(Solomon)

イスラエルの三代目の王、ダビデの子(サムエル記下 11 章、12:24-25、列王記上 1-11 章)。名前は「平和な」という意味。ソロモン時代に王国は最も繁栄し、エルサレムに神殿と宮殿を建てる(列王記上 6-8 章)。ソロモンは知恵で知られ(3:16-28)、シエバの女王が名声を聞いてやって来る(10 章)。ソロモンの子レハベアムとヤロベアムの間の王位継承問題で、統一王国はそれぞれ北王国イスラエルと南王国ユダに分裂する(12 章)。

### ダニエル(Daniel)

イスラエルの預言者で黙示家。ノアやヨブと並ぶ義人の一人(エゼキエル書 14:14)。夢を解く能力がある。ダニエル書はバビロニア捕囚期に書かれたと想定されているが、実際にはマカベヤ戦争(紀元前 167-164 年)後半に書かれた。ダニエルの英雄的伝説物語(1-6 章)と終末の黙示的預言(7-12 章)で構成される。燃え盛る炉(3 章)とライオンの檻(6 章)からの脱出場面は有名。

### ダビデ (David)

イスラエルの二代目の王(サムエル記上16章-サムエル記下-列王記上2章)。名前は「愛された」という意味。巨人ゴリアトを倒した物語(17章)、ヨナタンの友情物語(18-20章)、サウル王からの逃亡物語は有名(上21章-下1章)。王となり(2章)、エルサレムを都に定める(6-7章)。ウリヤの妻バト・シェバとの間で罪を犯し(11章)、預言者ナタンの叱責で悔い改める(12章、詩編51編)。詩人として知られ(サムエル記上16:14-23)数多くの詩編を残す。

### ノア (Noah)

箱舟物語の主人公(創世記6-9章)。ダニエルとヨブと共に三人の義人の一人(エゼキエル書14:14)。神の言葉を信じて箱舟を作り、神の裁きである洪水を家族と共に逃れる。神はノアの子孫を祝福し契約の印として虹をかける(9章)。セム・ハム・ヤフェトの父。

### ハンナ (Hanna)

サムエルの母。祈りによりサムエルが与えられ神に献げる(サムエル記上1-2章)。

### ミリアム (Miriam)

モーセの姉、女預言者(出エジプト記2:4、15:20-21、民数記12章)。出エジプトの直後に、神を称えて歌い、タンバリンを叩いて踊る。イエスの母などの名前「マリア」は、ヘブライ語「ミリアム」のギリシア語表現。

### モーセ (Moses)

イスラエルをエジプトから救出した指導者・律法の授与者・最初の預言者(出エジプト記1-24章、32-34章)。「モーセ」は「引き上げる」という意味(2:10)。数奇な運命でエジプトの王宮で育つが、イスラエル人を救おうとして誤ってエジプト人を殺めてエジプト脱出してミディヤンの地で羊飼いとなる(出エジプト記2章)、80才の時に神の出現によりエジプトに戻りイスラエル民族を救う使命を与えられる(3-4章)。さまざまな困難の後に(5-12章)、紅海を渡る奇跡(14-15章)を経て、シナイ山で十戒(20章)を授かり神の民となる契約を結ぶ(19-24章)。40年間荒野をさ迷うが(民数記10-14、16、19-25章)、約束の地を見つつピスガの頂きで死ぬ(申命記1-3章、32-34章)。

### ヤコブ (Jacob)

イスラエルの族長の一人、イサクの子、12部族の長となる12人の父(創世記25-50章)。「ヤコブ」は「かかとをつかむ」という意味(25:26)。「天のはしご」の夢(28:10-22)、ヤコブの結婚(29-30章)、天使との格闘(32:23-33)、最愛の子のヨセフ物語(37-50章)での再会の場面(46-49章)は有名。

### ヨシュア (Joshua)

「ヨシュアとカレブ」と並び称されるモーセの後継者(民数記13-14、27章、ヨシュア記)。「ヨシュア」は「ヤハウエの助け」という意味。モーセに率いられたイスラエル民族が「乳と蜜の流れる地」、約束の地「カナン」に入る時の指導者。

### ヨセフ (Joseph)

ヤコブの12人の子でイスラエル12部族の族長の一人(創世記37-50章)。ヤコブに溺愛されたことで他の兄弟に妬まれて、エジプトに奴隷として売られる(37章)。ポティファルの妻の誘惑により濡れ衣を着せられて捕られるが(39章)、夢を解く能力でエジプトを飢饉から救い王に次ぐエジプトの政治的指導者となる(40-41章)。ヨセフの兄弟たちがしばしば飢饉を逃れてエジプトに来るが、最後に自分の身を明かし兄弟たちと和解して、父ヤコブと兄弟たちをエジプトに迎える(42-50章)。

### ヨナ (Jonah)

ヨナ書の主人公。預言者の一人。神の命令に背いてタルシシュ行きの船に乗るが、嵐に遭って大きな魚に飲み込まれ、魚の腹から無事に脱出し、ニネベで神の言葉を伝える。

### ヨブ (Job)

ヨブ記の主人公。財産を一切喪失し、その上身体的な病を患って、理由の無い苦しみに悩むが、神の義という問題を問い続け、友人たちの批判をかわして、新しい神理解に至る。

### ラケル (Rachel)

レアの妹、ヤコブの妻、ヨセフとベニヤミンの母(創世記 29-35 章)。思考と行動という人間の二側面の中で、思想的な女性を象徴する。

### リベカ (Rebecca)

イサクの妻。旅人のらくだにも水を与える親切心で結婚する話(創世記 24 章)は有名。

### レア (Leah)

ラケルの姉、ヤコブの妻、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ゼブルン、ディナの母(創世記 29-35 章)。思考と行動という二側面の中で、行動的な女性を象徴する。

### ルツ (Ruth)

ルツ記の主人公。ルツは隣国のモアブ人であるが、イスラエル人の主人が亡くなった後も、姑のナオミに仕え通し、やがてボアズと再婚し、その家系からダビデが誕生する。

## 資料 3. 新約聖書の主な登場人物

### アキラ (Aquila)

ポント生まれのユダヤ人キリスト者。職業は「 TENT 造り」。妻のプリスキラ(短縮形、プリスカ)と共にローマに住んでいた。クラウディオス帝(在位、紀元 41-54 年)のユダヤ人追放令(紀元 48 年)でローマを追放され、コリントにやって来る。そこで同業者のパウロと出会い、パウロはコリント滞在の初期にはアキラの家に滞在する(使徒 18:3)。その後、パウロと共にエフェソに渡る(使徒 18:18-19)。エフェソでは、アキラ・プリスキラ夫妻の家が最初の教会となる( I コリント 16:19)。ユダヤ人追放令が解除された後にローマに戻るが、アキラ・プリスキラ夫妻の家がローマの「家の教会」の一つになる(ローマ 16:3-4)。

### アナニア (Ananias)

パウロが回心した時に、パウロを受け入れて導いたダマスコの信徒(使徒 9:1-19)。

### アポロ (Apollos)

アレクサンドリア生まれのユダヤ人のキリスト教徒。名前はギリシアの太陽の神「アポロン」に由来する。雄弁術に長けていたが、キリスト教の知識の足りない所は、アキラ・プリスキラ夫妻に教えられる(使徒 18:24-28)。コリントの分派の原因になった「霊的熱狂主義者」は、アポロの支持者であったと思われる( I コリント 1:12, 3:4, 5:6, 4:6)。

### アンデレ (Andrew)

12使徒の一人。シモン・ペトロの弟。名前は「男らしい」という意味。ペトロと共に漁師であったが、イエスに召されてイエスの弟子となる(マルコ 1:16-20)。ヨハネ福音書によれば(1:35-42)、ペトロと共に洗礼者ヨハネの弟子だった。

### アンナ (Anna)

ルカ福音書によれば、メシアの誕生を待ち望んでいたやもめの老いた預言者(2:36-38)。断食したり祈ったりして神殿で神に仕える。

### アンナス (Annas)

洗礼者ヨハネが活躍した頃の大祭司(ルカ 3:2)。カイアファのしゅうと(ヨハネ 18:13)。ヨハネ福音書によれば、イエスの尋問はカイアファではなく、アンナスが行なう(18:12-24)。

### エパfras (Epaphras)

コロサイ教会の創始者、パウロの協力者(コロサイ 1:7-8)。パウロがエフェソで投獄された時に、パウロと共に捕らえられていた(フィレモン 23)。エパfrasは、エパフロデイトの短縮形であるが、フィリピのエパフロデイトとは別人。

### エパフロデイト (Epaphroditus)

フィリピ教会から派遣されたパウロの協力者。エフェソの獄中に捕らえられていたパウロに差し入れの贈り物を届けたが、瀕死の病気になる、フィリピの人々を心配させる。幸い病から立ち直り、テモテに連れられてフィリピに戻る(フィリピ 2:19-30、4:10-18)。

### エリサベト (Elizabeth)

洗礼者ヨハネの母、ザカリアの妻(ルカ 1章)。「神は私の誓い」という意味。ルカ福音書によれば、イエスの母マリアの親類(ルカ 1:36)。不妊であったが、洗礼者ヨハネを産む。

### カイアファ (Caiapha)

洗礼者ヨハネが宣教を始めたころの大祭司(ルカ 3:2、使徒 4:6)。マタイ福音書によれば、イエスの裁判で尋問した大祭司(26:57-68)。ヨハネ福音書によれば、イエス殺害の計画者(11:49-53、18:14)。

### ザアカイ (Zacchaeus)

エリコの徴税人の頭。イエスと出会って、家に迎え入れて回心する(ルカ 19:1-10)。

### ザカリア (Zacharias)

洗礼者ヨハネの父、エリザベトの夫、正しい祭司(ルカ 1章)。名前は「神は覚えておられる」という意味。洗礼者ヨハネの誕生物語では、天使の言葉を信じないで、洗礼者ヨハネが生まれるまで、ロがきけなくなった。ザカリアの讃歌(ルカ 1:68-79)でメシアの到来を讃える。

### サロメ (Salome)

(1) ヘロディア(ヘロデ王の妻)の娘のサロメ。名前は「平安」という意味。ヘロデ王の誕生日に舞を踊り、母ヘロディアの入れ知恵で洗礼者ヨハネの首を盆にのせてもってくることを要求する(マルコ 6:14-29)。

(2) イエスの女性の弟子のサロメ。復活の証人の一人(マルコ 16:1)。

### シメオン (Simeon)

ルカ福音書によれば、メシアを待望していた老人の預言者(2:25-28)、「シメオンの讃歌」(2:29-32)でメシアの到来を讃えるが、マリアの苦難をも預言する(2:33-35)。

### シモン (Simon)

(1) シモン・ペトロ。12使徒のリーダー。イエスが「ペトロ」(ギリシア語で「岩」という意味。アラム語では「ケファ」というあだ名をつける(マルコ 3:16、ヨハネ 1:42)。本名は「シモン」、「聞かれた」という意味。アンデレの兄。漁師であったが、イエスに召されて12使徒となる(マルコ 1:16-20)。マタイ福音書ではイエスが天国の鍵を授ける(マタイ 16:13-20)。図像学では「鍵」が印。後にエルサレム教会の柱となる(使徒 1-12章)。

(2) 熱心党のシモン。かつて熱心党員であった12使徒の一人(マルコ 3:18、使徒 1:13)。

(3) キレネ人シモン。アレクサンドロとルフォスの父。通りすがりにイエスの十字架を背負わせられる(マルコ 15:21)。

(4) イエスの兄弟シモン。イエスの弟の一人(マルコ 6:3)。

(5) らい病人シモン。ベタニアの人。その家でナルドの香油の物語が展開(マルコ 14:3-9)。

(6) ファリサイ人シモン。その家で罪ある女の香油の物語が展開(ルカ 7:36-50)。

### 主の兄弟ヤコブ (James the Brother of the Lord)

イエスの弟(マルコ 6:3)。ペトロやヨハネと共にエルサレム教会の指導者の一人(ガラテヤ 2:6-9)。イエスの母マリアも他の兄弟も最初のキリスト教徒になった(使徒 1:14)。12使徒のゼベダイのヤコブとは別人。

### シルワノ (Silvanus) [別名シラス (Silas)]

シルワノとシラスは同一人物。シラスはギリシア名、シルワノはそのラテン語表記で、ローマの森と野原の神「シルワノ」に由来。使徒言行録によれば、エルサレム使徒会議で(使徒 15章、ガラテヤ 2:1-10)エルサレム教会からアンティオキア教会に派遣される(使徒 15:22、32)。パウロの第二次宣教旅行で、テモテと共にマケドニア州やアカイア州で宣教活動するパウロを助ける(使徒 16:19, 25, 29, 17:1, 4, 10, 14, 15, 18:5、I・IIテサロニケ 1:1、IIコリント 1:19)。

### ステファノ (Stephen)

ギリシア語を母国語とするユダヤ人(これを「ヘレニスト」と言う)のキリスト教徒の代表。キリスト教の最初の殉教者。名前はギリシア語で「冠」という意味。ヘブライ語を母国語とするユダヤ人(これを「ヘブライスト」と言う)と異なり、神がどこにでも存在するという普遍主義の立場から「エルサレムの神殿には神は住まない」と神殿批判をしたことで、熱狂的なユダヤ教徒によって迫害を受けて殉教する(使徒 7章)。

### テトス (Titus)

ギリシア人のキリスト者。テモテと共にパウロの宣教旅行に従事した有力な助手、協力者。使徒言行録には登場せず、パウロ書簡にしか登場しない。エルサレム使徒会議では、アンティオキアから連れて来られた異邦人キリスト教徒の代表として、具体的に割礼を強要されず、異邦人の自由が認められる(ガラテヤ 2:1, 3)。コリント教会で和解する仲介の働きをし、コリントの募金運動の再開を促す(IIコリント 2:13, 7:6-7, 13-15, 8:6, 16-17, 23, 12:18)。ダルマティアまで宣教し(IIテモテ 4:10)、クレタ島のキリスト教の指導者となる(テトス 1:5)。

### テモテ (Timothy)

テトスと共にパウロの有力な助手、協力者。名前は「神の誉れ」という意味。母はユダヤ人、父はギリシア人のリカオニ

ア州出身者(使徒 16:1-3)。母エウニケと祖母ロイスも信者(Ⅱテモテ 1:5)。第二次宣教旅行でパウロに同行し、マケドニア州やアカイア州で宣教活動するパウロを助ける(使徒 17:14-15, 18:5, 19:22, 20:4, Iテサロニケ 3:2, 6, Ⅱコリント 1:19)。コリントで分派の問題が生じた時には、パウロにより第一コリント書を携えてコリントに派遣される(Iコリント 4:17, 16:10)。パウロがエフェソで獄に捕らえられている時にも、フィリピ書を携えてパウロの近況を知らせるためにフィリピに派遣される(フィリピ 2:19, 22)。

#### トマス(Thomas)

12使徒の一人(マルコ 3:18)。疑い深いトマスとも呼ばれる。イエスの手に十字架の釘の跡を見、わき腹の槍の跡を見るまで復活を信じないと言うが、やがて復活したキリストに出会い「見ないで信じる者は幸いである」と語られる(ヨハネ 20:24-29)。

#### ナタナエル(Nathanael)

フィリポと共に、最初に弟子になってイエスに従った一人(ヨハネ 1:43-51)。

#### ニコデモ(Nicodemus)

ヨハネ福音書によれば、サンヘドリン議会(70人議会)の議員の一人。イエスに霊的な真理を尋ねに来て(3:1-21)、イエスの遺体の埋葬の準備をし、イエスを埋葬する(19:39-42)。

#### パウロ(Paul)

ユダヤ人名サウロ(Saul)。キリスト教の迫害者から(ガラテヤ 1:13-14, フィリピ 3:5-6, 使徒 7:58-8:1)、復活したキリストと出会って異邦人への宣教者に劇的に回心する(ガラテヤ 1:15-17, フィリピ 3:7-11, Iコリント 9:1, 15:3-11, Ⅱコリント 4:4-6, 使徒 9, 22, 26章)。三度の世界宣教旅行を通して(使徒 13-20章)、割礼(創世記 17章)や食物規定(レビ記 11章)というユダヤ教の戒律にとらわれないキリスト教を広め(ガラテヤ 2:1-10, 使徒 15章;ガラテヤ 2:11-15)、ローマにまで至る(使徒 27-28章)。「テント造り」(使徒 18:3)で自給自足の宣教活動を行ない、貧しい人々への募金活動を行なう(Ⅱコリント 8-9章)。第一テサロニケ書、第一・ニコリント書、フィリピ書、フィレモン書、ガラテヤ書、ローマ書を執筆。

#### バラバ(Barabbas)

暴動で人殺しをして投獄されたが、イエスの代わりに恩赦で釈放される(マルコ 15:6-15)。

#### バルナバ(Barnabas)

キプロス島の出身、エルサレム教会で模範的な信徒(使徒 4:36-37)。パウロをアンティオキア教会に導き、そこでパウロと共に活躍する(使徒 11:22-30, 13-14章)。

#### ピラト(Pilate)

ポンテオ・ピラト。イエスが活躍した頃のユダヤ州の総督。イエスの裁判で十字架刑を宣告する(マルコ 15:1-15)。

#### フィリポ(Philip)

ナタナエルと共に早くから弟子となる(ヨハネ 1:43-51)。12使徒の一人(マルコ 3:18)。

### ヘロデ (Herod)

- (1) ヘロデ大王。イエスが誕生した頃のユダヤの王(マタイ 2 章)。
- (2) ヘロデ・アンティパス。ヘロデ大王の子。イエスが活躍した頃のガリラヤの領主(ルカ 3:1)。異母兄弟フィリポ(ルカ 3:1)の妻ヘロディアを奪ったことで洗礼者ヨハネが非難する(マルコ 6:17-18)。イエスは「あの狐」と呼ぶ(ルカ 13:31-32)。
- (3) ヘロデ・アグリッパ 1 世。使徒ヤコブを殺害したヘロデ大王の孫(使徒 12:1)。
- (4) ヘロデ・アグリッパ 2 世。パウロを尋問したヘロデ大王の曾孫(使徒 26 章)。

### マタイ (Matthew)

12 使徒の一人(マルコ 3:18)。マタイ福音書によれば、徴税人でイエスの弟子になるが(9:9-13)、マルコ福音書ではアルファイの子レビの物語とされる(マルコ 2:13-17)。

### マリア (Mary)

ヘブライ語の「ミリアム」(出エジプト記 15:20)のギリシア語表記。「解放」という意味。

- (1) イエスの母マリア。ヨセフの妻(マタイ 1-2 章、ルカ 1-2 章)。イエスの他、多くの子を産む(マルコ 6:3)。息子を氣遣う母(マルコ 3:20-35)。マリアの讃歌(ルカ 1:47-55)でメシアの到来を讃える。ヨハネ福音書によれば、イエスが最初に奇跡を起こす時に同席し(2:1-12)、十字架にも立ち会う(19:25-17)模範的な弟子として描かれる。使徒言行録によれば、最初の 120 人の信者の一人に数えられる(1:14-15)。
- (2) マグダラのマリア。七つの霊を追い出してもらった女性の弟子。財産を献げてイエスに仕える(ルカ 8:2-3)。イエスの十字架、埋葬、復活の中心的な証人(マルコ 15:40,47,16:1)。
- (3) マルタの姉妹マリア。ベタニアの女性の弟子で思想的な女性を象徴する(ルカ 10:38-42)。ヨハネ福音書によれば、ラザロの復活の証人(11 章)、ナルドの香油の女性とされる(12 章)。
- (4) 小ヤコブとヨセの母マリア。復活の証人の一人(マルコ 15:40, 47, 16:1)
- (5) ヨハネ・マルコの母マリア。初期エルサレム教会の重要な信者(使徒 12:12)。
- (6) クロパの妻マリア。ヨハネ福音書によれば、イエスの十字架の証人の一人(19:25)。
- (7) ローマのマリア。ローマの教会で苦勞した人(ローマ 16:6)。

### マルタ (Martha)

マリアの姉妹。自宅にイエスを招き入れて、せわしくもてなす行動的な女性を象徴(ルカ 10:38-42)。ヨハネ福音書によれば、ベタニアの村に住み、ラザロはその兄弟(11:1-12:11)。

### ヤイロ (Jairus)

会堂長の一人。12 歳の娘が死に臨んだ際に、イエスに蘇生される(マルコ 5:21-24, 35-43)。

### ヤコブ (James)

- (1) イエスの弟⇒「主の兄弟ヤコブ」参照
- (2) ゼベダイの子ヤコブ。12使徒の一人。大ヤコブと呼ばれる。弟のヨハネと共に漁師であった(マルコ 1:16-20)。あだ名は「雷の子」(マルコ 3:17)。
- (3) アルファイの子ヤコブ。12使徒の一人。小ヤコブと呼ばれる(マルコ 3:18)。

### ユダ (Judah)

- (1) イスカリオテのユダ。12使徒の一人。「裏切り者のユダ」と呼ばれる(マルコ 3:19)。銀貨 30 枚で(マタイ 26:15) イエスを裏切る(マルコ 14:10-11, 43-50)。その後自殺するが、マタイ福音書によれば首吊り自殺(マタイ 27:3-10)、使徒言行録によれば墜落死(使徒 1:18-20)。
- (2) イエスの弟のユダ。「主の兄弟ヤコブ」と共にイエスの弟の一人(マルコ 6:3)。

### ヨセフ (Joseph)

- (1) イエスの父ヨセフ。マリアの夫(マタイ 1-2 章、ルカ 1-2 章)。マタイ福音書によれば、職業は大工(13:55)。
- (2) アリマタヤのヨセフ。ユダヤのサンヘドリン議会(70人議会)の議員の一人。ピラトに願い出て、イエスの遺体を十字架から降ろす(マルコ 15:42-47)。
- (3) イエスの弟のヨセ(フ)。イエスの弟の一人(マルコ 6:3)。

### ヨハネ (John)

- (1) 洗礼者ヨハネ。荒野で悔い改めとその印として洗礼を迫る(マタイ 3:7-12)。イエスに洗礼を受ける(マルコ 1:2-11)。終末を告げる預言者(ルカ 7:18-35)。
- (2) ゼベダイの子ヨハネ。12使徒の一人、ヤコブの弟。(マルコ 1:16-20, 3:17)。
- (3) ヨハネ・マルコ。マリアの息子、パウロとバルナバの助手(使徒 12:12, 13:5, 13)。

### ラザロ (Lazarus)

- (1) ベタニアのマルタとマリアの兄弟で、イエスに蘇生させられる(ヨハネ 11 章)。
- (2) 金持ちの門前にいた貧しい物乞い。死後金持ちと運命が逆転する(ルカ 16:19-31)。

## 資料 4. キリスト教の有名な祈り

### 主(イエス)の祈り(1 世紀、ユダヤ)

天にいます私たちの父よ、  
御名を崇めさせて下さい。  
御国を来たらせて下さい。  
御心が天になるように、地にもなさせて下さい。  
私たちの日毎のパンを今日も私たちに与えて下さい。  
私たちに罪を犯すものを私たちが赦すように、私たちの罪を赦して下さい。  
私たちが試みに遭わせず、悪より救い出して下さい。  
国と力と栄えは、あなたのもものだからです。アーメン

### 聖フランシスの平和の祈り(13 世紀、イタリア)

主よ、私を平和の器にして下さい。  
憎しみのあるところに愛を、



傷のあるところに赦しを、  
疑いのあるところに信仰を、  
絶望のあるところに希望を、  
暗闇のあるところに光を、  
悲しみのあるところに喜びを蒔かせて下さい。  
おお、聖なる創造者よ、  
慰められることよりも慰めることを、  
理解されることよりも理解することを、  
愛されることよりも愛することを、  
私が求めるようにして下さい。  
私たちが受けるのは与えることにおいてであり、  
赦されるのは赦すことにおいてであり、  
永遠の命に生まれるのは死ぬことによってであるからです。

#### ラインホルド・ニーバーの祈り(20世紀、アメリカ)

神よ、変えることのできないものを受け入れる冷静さを私にお与え下さい。  
変えることのできるものを変える勇気をお与え下さい。  
そして、両者を識別する知恵をお与え下さい。